

イネ科花粉症の研究
—イネ科植物分類に関する疑問—

○宇佐神 篤（東海花粉症研究所、うさみクリニック）、中山 哲、田中 昭（ファディア株）

背景と目的：これまでイネ科分類体系は外形とくに花部の構造をもとにする分類から始まり、1986年の Clayton の体系に至った。その後、DNA 分析による系統解析へと発展し、従来の分類体系は修正が加えられつつある。イネ科花粉症の診療にあたっては、より正確な分類が有用である。イネ科花粉症患者の血清中 IgE 抗体量の相関性から、従来の植物分類とは一致しないことが示唆される結果を得たので、学際的なご批判、ご教示を求めて報告することにした。

方法：発作期と血清抗体測定結果からイネ科花粉症と診断した 24 例につき、Uni-CAP により測定した 13 アレルゲン IgE 抗体量の相関係数を求め、アレルゲンとしてのイネ科花粉の相関を検討した。血清は 2001 年から 2009 年間にうさみクリニックにて採取した。

結果：イチゴツナギ連ナガハグサとコムギ連コムギ(属)、カラスムギ連ハルガヤ間での相関係数は 0.996～0.999 と高く、イチゴツナギ連相互間の 0.898～0.984 よりも高かった。コムギ連、カラスムギ連はイチゴツナギ連と植物分類上、より近縁な関係にある種を含む可能性、したがって、植物分類学上見直しを要する可能性を示唆した。